

環境の「知」を地域とともに

国立環境研究所福島地域協働研究拠点研究グループ長

林 誠二
はやし せいじ



私が所属する国立環境研究所は、東日本大震災の直後から被災地の環境復興に向け、環境影響評価、環境に配慮した持続可能な街づくり、将来の災害に備えた環境管理などの研究を進めてきた。2016年に福島県三春町に福島支部(2021年には福島地域協働研究拠点(以下、福島拠点という)に名称変更)を開設し、地元の自治体、研究機関、学校、NPO、企業など様々なステークホルダーと連携した地域協働を進めている。

研究者として放射性セシウムの環境中の動きやその影響などのフィールド調査を重ね、地元の方々とのつながりが増える中で、蓄積した研究成果を地域に還元し、協働することこそが復興や環境保全に効果的に結びつく実感するようになった。そこで、

福島拠点のメンバーとともに、環境や地域課題に関する対話の場を創り、そこからさらに新たな協働研究を展開すべく、日々、試行錯誤している。

例えば、福島拠点は、2021年度からNPO法人しんせいが進める「山の農園」プロジェクトを支援している。しんせいは、福島第一原子力発電所事故で広域避難等を余儀なくされた障がい者を支援するため、県内13の福祉事業所と企業・NGO/NPO・個人が製菓やミシンワーク等を通じて連携・協働するプロジェクトなどを推進してきた。近年は農福連携事業に取り組み、2020年には、環境に配慮した福祉農園「山の農園」という拠点を郡山市近郊に整備した。ここでは、障がいのある方が畑のブルーベリーを摘み、隣接の作業所で加工することに

より就労支援の場として加え、持続可能な共生社会のあり方を考える「山の学校」という取り組みを進めている。山の学校では、農作業や防災

／環境学習等の体験プログラムを地域の高校生とともに提供し、県内外から様々な参加者を受け入れている。この中で私たちの福島拠点は、自然共生や森林を主とした地域資源の活用、福島第一原子力発

電所事故による環境放射能汚染の実態等を学ぶ環境学習プログラムを担当している。

今秋、こうした実践の積み重ねから新たな協働の仕組みが生まれる。福島拠点、県立あさか開成高校しんせいの三者間でパートナーシップ協定を締結し、例えば、しんせいの利用者に高校生がインタビューを行い、「誰ひとり取り残さない」防災のあり方をまとめる活動や、高齢者のごみ出し支援を高校生と障がいのある方が協働する中で地域の社会課題を見つけていくなど、災害に強く環境に配慮した地域コミュニティの醸成に向けた取り組みを進めていこうとしている。

福島が環境がより良くなるように、安心な暮らしと豊かな社会が広がるように、世界各地の地域づくりの礎となるように、地域協働に携わる研究拠点の一員としてこれからも歩み続けていきたい。



「山の学校」での農作業や環境学習プログラム

時の調べ Essay

略歴
東北大学大学院工学研究科博士課程(土木工学専攻)を修了後、1996年に国立環境研究所に入所。中国長江流域や亜熱帯島嶼地域等における流域環境管理に関する研究に従事。2011年3月福島第一原子力発電所事故直後から河川流域における放射性物質の環境動態の解明や影響評価に関する研究に取り組む。2016年4月から滝桜で有名な福島県三春町に在住。災害環境研究として、地域と協働して災害に強靱で持続可能な社会の構築に向けて研究面からどのように貢献できるのか、日々模索中

FRECC+(フレックプラス)・・・WEBマガジン ふくしまから地域と環境の未来を考える
<https://www.nies.go.jp/fukushima/magazine/index.html>